

この書は水樹素子生成までのお話（断片）

朝

ーミーンミーン。蟬の主張と木のざわめきが全ての音をかき消している。夏の太陽が殺人的な日差しを照り続け、地面を焦がしている。

「行ってくる」

蟬の音にかき消されるような小さな挨拶をしつつ、緒岸 蒼（オキシ アオ）は玄関の扉を開けようとした。

「今日夜、話があるから」

祖父が後ろから話しかけてきた、咄嗟に蒼は後ろを向いた。

「わかった」

それ以降の会話はなく蒼は再び「行ってくる」と叔父に挨拶を残し、外に出た。

外は恨めしいほどの快晴で、朝の程よい風が吹き抜けている。風はあるがアスファルトが焼けるようにあつい。

緒岸の家は他の生徒の通学路から少し離れた場所にある。なので登校時の最初は常に一人だ。彼自身は一人が好きなのでこの道は気に入っている。

もう少し日陰があればなと思うのだが。

数分ほど昨日の出来事などとりとめのない記憶を思い出しつつ一人で登校していると賑やかな通学路が見えて来る。

数名の男子、女子のグループが8、9ほど一つの学校を目指し歩いている。この時間帯は電車通学の人たちがこの道を通るので比較的賑やかだ。

「昨日の動画見た？」「見た見たやばいあれ」「また人が消えたんだって」「今度はだれ？」「週末どこ行くよ」

蟬の鳴き声をかき消すような雑踏の中、一人で歩いている。会話がたくさん耳に入ってきて来るが緒岸にとってそれは心地の良いものだった。

通学路はいくつかの交差点を超え、最後に長い直線がある。